社会学部論集　第51号（2010年9月）

ホネットの物象化論

――その射程と限界――

辰　巳　伸　知

〔抄　録〕

アクセル・ホネットの最新の研究領域である物象化論は，承認論を通じてルカーチの物象化論を再構成しようとする大胆な試みである。しかしそれは，ルカーチの『歴史と階級意識』を「誤読」することによって，ルカーチの物象化論にあった批判的ポテンシャルの核心を骨抜きにしてしまっているのではないか。また，承認論を通じて再構成された物象化論自体は，以前の『承認をめぐる闘争』等で展開された承認論のような，「社会的コンフリクトの道徳的文法」を示すことによって，さまざまな社会的コンフリクトを説明し解決の展望を開くような切れ味や射程を，少なくともこれまで以上にはもっていないのではないか。

キーワード：ホネット，ルカーチ，物象化，承認

1．なぜ今「物象化」なのか

2005年3月にカリフォルニア大学バークリー校で行なわれた「タナー講義」[1] において，ドイツから招かれたアクセル・ホネットは「物象化（Verdinglichung）」をテーマに選んだ。この講義は，ドイツ語で書籍化され，ほどなくマーティン・ジェイの序文と三人のコメンテーター（ジュディス・バトラー，レイモンド・ゴイス，ジョナサン・リア）のコメント，およびホネット自身の「返答」を付した英訳も出版された[2]。その後引き続きホネットは，各地での講演やシンポジウムでも，このテーマをくり返しとり上げ，議論を深化・展開させようと試みている[3]。しかし，1923年に刊行された『歴史と階級意識』[4] でゲオルク・ルカーチによって提起され，特に1920年代から30年代にかけて西欧マルクス主義の知的潮流に多大な影響を及ぼしたものの，第二次世界大戦以後，時代診断における中心的位置やアクチュアリティを喪失してしまったと彼自身も考える物象化の概念を，なぜ今さら彼は自らの最新のテーマとしてとり上げようとするのであろうか。

ホネットは『物象化』の序章で，近年物象化概念が復権しつつある徴候を，四つの局面にわ

たって指摘している[5]。まず，レイモンド・カーヴァーやハロルド・ブラドキー，ミシェル・ウエルベック，エルフリーデ・イェリネク，ジルケ・ジョイアマンらの作品のような最近の新たな小説や物語が，自分たちや他者に対して生命のない対象に対するように接する登場人物を描いている点が指摘され，また文化社会学や社会心理学の領域における感情的自己操作のテーマ化，マーサ・ヌスバウムに代表されるような倫理学や道徳哲学における物象化概念の使用，脳研究における人のモノ化ついての議論が，それらにおいて物象化という概念が直接使われているか否かは別にして，物象化論の問題圏域に属するものとして指摘されている。

しかし，単純にしばし廃れていた概念が最近復権しつつあるからという理由だけで，いわば時流に乗るような形で，ホネットは物象化概念を再構成しようとしているのではなかろう。ホネットは，著書のなかで明示してはいないが[6]，フランクフルト学派「第一世代」の批判的社会理論のモチーフを引き継ごうとしているのではないかと思われる。ホネットも言うように，物象化という視座は，フランクフルト学派の諸々の著作，特にアドルノの著作においては重要な位置を占めていたのであり[7]，同一性論理に基づく階級意識論は厳しく斥けつつも，物象化論はそのままの形ではないにせよ，フランクフルト学派がルカーチから継承した重要な知的遺産だったからである。また，ホネットが物象化論にとり組んだのは，フランクフルト学派「第二世代」を代表するハーバーマスが主著『コミュニケーション的行為の理論』[8]で，思想史的，学説史的に展開した物象化論批判（第1巻第4章「ルカーチからアドルノへ――物象化としての合理化」）を通じて，コミュニケーション・パラダイムに基づいた「システムによる生活世界の植民地化」テーゼを導き出したことに対しての，フランクフルト学派「第三世代」を代表するとされるホネットの継続的応答と見ることもできる[9]。

一方でホネットは，1985年に刊行された『権力の批判――批判的社会理論の新たな地平――』[10]以後，自らの「承認論」的アプローチを通じて社会病理や社会的コンフリクトの分析枠組を提示しようとしてきた。その試みが体系的なものとして結実したのが『承認をめぐる闘争――社会的コンフリクトの道徳的文法――』[11]であり，それを正義論や道徳哲学の文脈でさらに展開したのが『正義の他者――実践哲学論集――』[12]であるが，近年のホネットによる物象化論の再構成の試みは，そのような自らの承認論の継続的な深化・展開の試みでもあろう。それは，物象化論を「承認の認識に対する優位」というテーゼによって再定式化することを通じて，同時に従来の承認論に新たな次元を切り開く試み，と言えようか。ただ，その成否に関しては，後に述べるようにいくつかの疑問が残る。本稿ではまず，ホネットによる物象化論の再構成の概要を示した（第2章）後に，次の二点について論及してみたい。第一に，ルカーチの物象化論を承認論の視角から大胆に再構成するホネットの試みには，ルカーチの物象化論にあった批判的ポテンシャルの核心を，文字通り骨抜きにしてしまう危険はないだろうか，という点（第3章）。このことは，ルカーチの『歴史と階級意識』，特にその中心をなす「物象化とプロレタリアートの意識」の読み方に関わる問題である。次に，一点目と関連する

ことであるが，ホネットによって再構成された物象化論の，批判的社会理論としての切れ味や射程の問題である（第4章）。結論を先取りすれば，物象化論によっていわば再構成された承認論は，以前の『承認をめぐる闘争』等で展開された承認論のような，「社会的コンフリクトの道徳的文法」を示すことによって，さまざまな社会的コンフリクトを説明し解決の展望を開くようなポテンシャルを，少なくともこれまで以上にはもっていないのではないか。

2．ホネットによる物象化論の再構成

「物象化」という概念が今日においてもまだ用いる値打ちがあるのかどうか，この問いに対してホネットは，ルカーチが『歴史と階級意識』の「物象化とプロレタリアートの意識」において展開した議論を批判的に吟味することによって，答えようとする。ルカーチは，「物象化とプロレタリアートの意識」の冒頭部分で端的に物象化を「人間と人間との関わりあい，関係が物象性（Dinghftigkeit）という性格を」[13] もつようになる事態であると規定している。言い換えると，もともとは物的な特性をもたないもの，たとえば人間的なものが，「物」のように現象するということである。このような規定の読み方としてホネットは，三つの可能性を指摘する。一つ目は，物象化とは認識上のカテゴリー・エラーであるとする解釈。二つ目は，人々のふるまい方が道徳原則に反するようになるという解釈。三つ目は，実践の形態が全体として歪曲される事態になるという解釈。ホネットはルカーチのテクストの解釈において，一つ目と二つ目を斥ける。物象化とは多層性と持続性をもつ現象であり，単にその時々の個人的な認知的誤謬には還元できないものである。それは，「人間の『第二の自然』と言えるまでに資本主義社会において広まった，われわれの視座を歪める『態度』あるいはふるまい方を形成する」のである。またそれは，「倫理的に誤ったふるまい，道徳原則への違反としてもとらえるべきではない」[14] のであり，したがってルカーチの物象化概念は，先に述べた近年の倫理学や道徳哲学，脳研究をめぐる議論で前提にされているような規範を含まない。ルカーチにとって他者を道具化するようなふるまいは端的に社会的事実なのであり，それは資本主義社会のいわばシステム命令なのである。

ルカーチにとって物象化において認識上のカテゴリー・エラーも道徳的に誤った態度も問題になりえないとするのなら，残されているのは物象化を「全体として誤った実践の形態」をもたらす事態と考える第三の解釈である。ホネットによれば，ルカーチにとっての物象化された主体の態度とは共感なき観察的態度なのであるが，それは人間の実践の本来的でよりよき形態とは対立している。このような表現はもちろん規範的含意を免れていないが，「ルカーチが自らの物象化概念において依拠している規範的原則は，道徳的に正当化された原理の全体にあるのではなく，正しい（richtig）人間的実践という概念にある。そして，そのような類の概念はその正当化を，伝統的に道徳哲学や倫理学と呼ばれる領域からよりも，社会存在論や哲学的

人間学からより強く引き出しているのである。」[15]

ホネットは，ルカーチのテクストのなかに「公式の」見解，あるいは通常これまでなされてきたルカーチ解釈とは異なる主張を，大胆に見いだそうとする。すなわち，「物象化の強制に影響されない人間と世界との実践的関係」を記述する際に，ルカーチは主体の側については「体験をともにする（miterlebend)」とか「有機的な統一（organische Einheit)」，「協働的な（kooperativ)」といった表現を，対象の側については「質的に唯一無比なもの（qualitativ Einzigartiges)」とか「本質的なもの（Wesentliches)」と言った表現を用いているとする。これらは，ヘーゲルや特にフィヒテに従って純粋で歪められていない「活動性」を，客体が主体の産物となり精神と世界が符合するようなあり方と考える「公式の観念論的表明」とは異なった見解である。商品交換によって強制された持続的な物象化作用のなかで，行為者は本源的な人間的実践から引き離され，自らの環境のなかで生じる出来事に対して能動的，共感的に関与することなく，静観的な傍観者の立場にとどまり続けるのである。

> 集団へと拡張された主体を通じての客体の産出ではなく，ここでは主体の間主観的な別の態度が，物象化をもたらす実践の定義とあざやかな対照をなすものとして役立つモデルとなる。私の考察を進めるにあたって，これから何よりも私の関心を引くのは，ルカーチのテクストにおけるこのような軌道なのである。私は，次のような問いに向かおうと思う。すなわち，当該の事態が本源的な実践 ―― そこでは人間は，自らに対して，そして自らの環境に対して共感的態度を引き受ける ―― が萎縮したり，歪曲されたりすることとして理解するような仕方で，「物象化」の概念を再びアクチュアルなものにすることは，本当に有意義であるのかどうか，という問いである[16]。

ホネットの答えは，もちろん「然り」であり，自らの物象化論の基底を形づくることになる人間的実践の本源的形態についての考察を導き出すために，ホネットはルカーチの同時代人であったマルティン・ハイデガーとジョン・デューイの思想を参照しようとする。ルカーチとハイデガーとの「選択的親和性」は，主体と客体の対立図式，二元論，すなわち「認識する主体を世界に対して中立的に対立させるような支配的観念」[17] に対する徹底的な批判にある。そのような支配的観念を打破し，人間と世界との本源的なあり方を示すために選んだ概念が，ルカーチの場合は共感的実践であり，ハイデガーの場合は『存在と時間』における「気遣い（Sorge)」なのである。また，デューイにおいてこのような発想とパラレルなのが，世界への実存的関心の先行性を強調する彼の議論である。すなわち，本源的，原初的には人々は世界に対して「経験の単一の質」を保持しつつ関与するのであり，そこにおいては経験は感情的，認知的，意志的要素に分解されてはいない。このようなデューイが強調するような「どこまでも実存的な色合いを帯びた支持的な心配り」を，ホネットは「承認（Anerkennung）と名づけ

ようとする。「そういった関心は，世界には価値があると思う経験から発する。承認する態度とはしたがって，他の人格や事物がわれわれの生活の遂行に対して有する質的意味を尊重することなのである。」[18]

つぎにホネットは，思想史的文脈を離れて「共感的態度が中立的現実把握に先行する，すなわち承認が認識に先行するというテーゼ」を論証しようとする。ここで注意しなければならないのは，ホネットが，ルカーチ，ハイデガー，そしてデューイの所説の検討を通じて取り出した「承認」とは，決して「観察者の視座」に対する「参加者の視座」に立つことではない，という点である。「参加者の視座」についての議論は通常，人間はそのつどのコミュニケーション・パートナーの視座に自らを移しかえ，二人称の役割に身をおくことにより，相手の願望や心情や意志を理解するのであり，そのことによって自らのアイデンティティと人間相互間の紐帯が築かれる，とするものである。しかし，ホネットが用いる「承認」概念には，視座の引き受け行為を超えた，あるいはそれに先行する感情的で肯定的な要素がつけ加わっている。そのような「承認」の「優位」を論証するに際して，ホネットは発生的な論拠と体系的，カテゴリー的論拠をもち出す。発生的な観点からは，発達心理学の最近の知見，特にピーター・ホブソンやマイケル・トマセロによる自閉症児の研究 —— それは，従来の幼児のコミュニケーション関係に焦点を合わせた発達心理学的研究の大部分が陥った認知主義の傾向を批判し，幼児と幼児が準拠する人物との感情的同一化を重要視している —— を引きあいに出して，ホネットは自らの「承認の優位」仮説を根拠づけようとする。さらに，時系列的に承認が認識に先行するというだけではなく，認識に対する承認の優位性については，概念的にもそれが立証されなければならない。そこでホネットは，スタンリー・キャヴェルによる他者の心的状態についての直接知批判を援用する。

> 他の主体の感情の状態を認識することができるためには，どんな場合でも必ず前もって，私がその他者の感情世界にいわば実存的に引きこまれていると感じるような一定の態度がなければならない。そのような「動き」がなされ，それとともに他者との一定のつながりが形づくられることによって，私はその他者の感情表現を内容通りの真正なもの，すなわち，相応のやり方で反応するよう私に発せられた要請として受けとめるのである。それゆえにキャヴェルにとっては，「承認すること」とは，二人称の人物が示す行動表現が何らかの性質をもった対応を要求するものと理解できるような態度を引き受けることを意味する[19]。

このような承認する態度の引き受けについて注意すべき点は，そういった態度が常に他者に対して好意的で愛情に満ちているとはかぎらない，ということである。承認する態度において重要なのは，相手の人間的人格を非認識的に（認識以前的に）確認することであり，単なる無

関心や否定的感情の帰結を排除するものではないのである。

認識に対する承認の優位，すなわち他者を中立的に捉えることに対する共感の優位を説いたうえで，いよいよホネットは物象化の概念に立ち戻る。ホネットは，本来あるべき「承認に敏感な（anerkennungssensitiv）認識の形式」に対して，「先行する承認に由来しているという感覚がもはや失われているような認識」を対置して，後者におけるような「承認の忘却（Anerkennungsvergessenheit）」を「物象化」と考える。「私が『物象化』概念を新たに規定するための鍵としたいものが，まさにこの忘却という契機，すなわち記憶の喪失（Amnesis）という契機なのである。われわれが認識を遂行する際に，それ自体が承認的態度に基づいていることについての感受性を失う程度に応じて，われわれは他の人々をただ感覚を欠いた対象のように知覚するという傾向を強めてしまうのである。」[20]

ルカーチが全体化する（totalisieren）物象化批判のなかで，すなわち商品交換の問題性から一挙に社会のあらゆる局面における物象化現象を導き出そうとしたなかで行なおうとした試み ―― 他者に対する物象化だけでなく，物理的自然に対する物象化や自己に対する物象化も物象化論の問題圏域に包摂する試み ―― を，ホネットもまた引き受ける。ただし，ルカーチとは異なって彼は，それぞれの局面における物象化のメカニズムは区別し，さらにはそれぞれの局面の間に必然的連関は想定しない。本稿の主題とは直接関連しない問題なので，ここでは詳説しないが，まず自然の物象化については，アドルノの『ミニマ・モラリア』や『否定弁証法』での考察に依拠して，それは間接的な意味で語られうるとする。つまり，他者に対する承認は，その他者が抱いている人間以外の対象についての主観的な表象や感覚の承認と結びついており，自然が物象化されるということは，対象であるその自然を認識することにおいて他者の視座がそれに付与した意味の諸相に対する注意を失ってしまうということなのである。また，ルカーチのテクストでは，ジャーナリストたちがその時々の読者の関心にあわせて，自らの主体性や気質や表現力を切り売りする不定見の問題としてとり扱われている自己自身に対する物象化の問題については，それを論じるにあたって自分自身の願望や感情や意図に対する物象化された自己関係のモデルとして「探偵主義（Detektivismus）」と「構成主義（Konstruktivismus）」があげられている。「探偵主義」とは，所与の対象をそのまま写しとる認識のモデルに従って自己の内面に向かおう，向かうことができるとする立場である。この立場の困難は，内面的な知覚器官のようなものを特別に想定しなければならないことにあり，また「この内へと向かうまなざし」の想定は，はジョン・サールが指摘したように内面へと向けられた知覚行為を知覚する行為を想定しなければならず，結局無限後退に陥ってしまう。また，この立場は，われわれの心の状態における内容の散漫さや不確かさに十分注意を払っていない。「構成主義」は，われわれは自らの意図を表現する瞬間に，相互行為のパートナーに対してその意図を存在させようと決めるのである，と考える立場である。いわば自由な意志決定の産物として願望や感情を捉えるこの立場は，われわれはそれに対する解釈の余地が現われるまでは心的

な状態に受動的にさらされたままであるという事態を適切に考慮に入れていない。ホネットが適切な自己関係のモデルとして提示するのは，心的状態を外的対象のように知覚するのでもなく，時々の表明を通じて構成するのでもなく，われわれが内的になじんでいるものに準拠して分節化するものと捉える，彼が「表現主義（Expressionismus）」と呼ぶ立場である。このような立場においては，主体は自分自身の感情や願望を分節化するに値するものと捉えていることが前提となる。ここでも，自己への肯定的承認が自己認識に先行するのである。

ホネットの『物象化』は，さらに「物象化の社会的起源」にも説き及んでいる。つまり，人間学的，社会存在論的必然性によって，承認的態度は客観的認識を遂行する態度に発生的にもカテゴリー的，概念的にも先行しているとするのなら，なぜ「承認の忘却」としての物象化が生じるのか，という問いがアポリアとして立ち現われる。ホネットは，物象化のいわば「社会的病因論」をルカーチの物象化論を批判することを通じて示そうとしている。ホネット自身の物象化の「社会的病因論」については，ホネットの物象化論の社会的批判理論としての射程の問題とともに4．でとり上げることにする。次章では，ホネットによるルカーチ批判やルカーチ解釈の適否を検討してみることにする。

3．関係の物象化と世界の変革

ルカーチの物象化論の「公式」戦略については，前章で，それを却下しルカーチのテクストに潜在的に見られる「非公式」の見解を支持するホネットの姿勢を確認した。すなわち，主体＝客体の同一性論に基づく純粋な活動性としてのプロレタリアートの世界産出行為という観念論的フィクションを斥けて，「共感的実践」というはるかに穏当で実りのある（とホネットが考える）人間的実践の本源的様態という着想を取り出すのである。ルカーチのテクストから，実際にそのような「非公式」の見解が取り出せるかどうかについては後に触れるが，ホネットが見るところのルカーチの物象化批判の問題点はそのような「公式戦略」以外にも多岐に渡るものである。そのなかでも重要なのは，ルカーチが物象化現象のすべての元凶を商品交換の資本主義的一般化に帰している点である。物象化がなぜ引き起こされるかという「社会的病因論」に関して，ルカーチの社会理論的テーゼには致命的な誤りがある，とホネットは考える。

ルカーチは，物象化が社会全体に恒常的に作用すると考えており，その原因を資本主義社会における商品交換の拡張に見いだしている。商品交換が拡張し，それを範型に意識や行為を定位するよう強いられた主体は，目前の対象を単に潜在的に利用可能な「物（Dinge）」としてしか認識しなくなり，目前の生身の人間を自らの利益を得るための「客体（Objekt）」としてしか見なくなり，自らの能力を収益獲得機会を高める「資源（Ressource）」としか考えなくなるのである。物象化が生じる局面として，他者，自然，自己を設定するという点では，ホネットはルカーチに従っているが，物象化の諸形態の間に必然的なある種の統一性を想定する

こと，ならびにそれ以上に資本主義的商品市場のシステム命令として物象化が全面化すると主張するルカーチの考えに対しては，ホネットはそれは恣意的想定であると断じる。実際，ホネットも指摘するように，『歴史と階級意識』の「物象化とプロレタリアートの意識」を読むと，マルクスによる商品フェティシズムの分析からなめらかに生活世界のあらゆる領域の物象化の発生と展開が論証されているわけではなく，ウェーバーの合理化論を接合する形でそれがなされていることに気づく。資本主義市場に端を発する物象化現象が，経済的取引の現場以外のすべての社会的生活領域に次々と感染し，それらを呑みこんでいくと想定できる確かな根拠は示されていない。「家族についても政治的公共圏についても，親－子関係についてもレジャー文化についても，資本主義市場の諸々の原則によってそのような『植民地化』が実際に生じることについては，ルカーチは手がかりすら示していない」[21] のである。

さらにホネットは，資本主義市場の只中においてすら，ルカーチが主張するような物象化が必然的に生じる，とは考えない。というのも，ルカーチは社会的関係の脱人格化のプロセスと物象化を同一視する誤りに陥っているからである。交渉相手のパーソナリティや個性を捨象した，利潤の極大化という目的に志向した行為によって織り成されている脱人格化された関係においても，たとえ匿名となっているにせよ相互の人格としての基礎的な承認は前提されている，とホネットは考える。法的な権利主体としての，あるいは責任能力のある交換，交渉のパートナーとしての承認関係は存在するのであり，決して人間的特性を欠いた「物」として相対しているわけではないのである。

資本主義的商品市場が一種のマジック・ワードになっているという点，物象化のさまざまな局面を適切に区別していないこと，脱人格化と物象化を混同していること，以上三点に加えて，ホネットはルカーチの物象化批判がまったく及ばない，きわめて重要な社会病理の存在を指摘する。つまり，「この間，われわれにとって物象化する態度の例として何といってもはるかに強烈なすべての事柄，すなわちレイシズムや人身売買における残忍な非人間化の形態の数々を，彼は欄外ですら主題化しない」[22] のである。

以上のようなホネットによるルカーチ批判はかなり手厳しいものであり，彼は「ルカーチの物象化分析の社会学的説明枠組みに全体として見切りをつけるのが，今日では得策であると思われる」[23] とすら断言する。確かに，ホネットによるルカーチの物象化論の問題点の指摘は，おおむね妥当であると思われる。ルカーチのテクストそのものがきわめて錯綜しており，本来仕分けして論じなければならないさまざまな論点が混淆しているからである。『歴史と階級意識』の難解さは，ドイツ観念論哲学の概念や論法が跳梁跋扈しているという点にだけあるのではなく，このような混淆にもよるところも大であると思われる。しかし，それにもかかわらず，ホネットのルカーチの受容には大きな欠落がある。ホネットは，故意か否かは不明であるが，ルカーチがそもそも物象化という概念で意図していた事柄を見落としてしまっているのではないか。

ホネットの承認論的アプローチによる物象化論の再構成は，すでに見たように，他者の物象化，自己の物象化，自然の物象化という三つの局面において展開されている。そのなかでも，主たる考察の対象になっており，また彼の人間学的，社会存在論的前提を立論し，社会病理現象を剔抉し分析するための重要な道具立てになっているのは，他者の物象化という概念である。しかし，ルカーチの物象化概念は何よりも，先に見たホネットの『物象化』第一章の冒頭にも引用されている「人間と人間の関わりあい，関係が物象性という性格をもつ」ようになる事態を指している。マルクスの『資本論』における商品の物神性論からヒントを得て，ルカーチは物象化を人と人との社会的関係が物と物との関係という「幻影的な対象性（Gespenstige Gegenständlichkeit)」をもつことと定義している[24]。これは，目の前にいる特定の他者のパーソナリティを否認し，他者を単なる物であるかのように扱う，という事態とは異なっている。さまざまな物象化の現象をいささか混濁したやり方で論じるなかにあってもルカーチが終始念頭に置いてはずの，そして「物象化」という言葉のこれまでの通常の用語法であったと思われる「関係の物象化」[25] については，ホネットはまったく触れていないのである[26]。ルカーチは，次のように述べている。「この物象化の基本的事実によって，人間独自の活動，人間独自の労働が，何か客体的なもの，人間から独立しているもの，人間には疎遠な固有の法則性によって人間を支配するもの，として人間に対立させられる，ということである。しかもこのことは，客体的な側面においても，主体的な側面においても生じてくる。」[27]

ルカーチは，物象化された社会が「第二の自然」[28] として凝固し，人々の主体的実践による介入や変革を受けつけなくなっている事態を批判的に解明しようとしている。そして，ルカーチが望みを託すのは，「歴史的発展過程の同一的主体＝客体」[29] としてのプロレタリアート，あるいはそのプロレタリアートの階級意識である。ルカーチは，物象化の強制力を突破し，全体の認識およびその変革を可能にするアルキメデス・ポイントとして，階級意識に目覚めたプロレタリアートの革命的実践に期待するのである。プロレタリアートは，「歴史的発展の同一的主体＝客体」，すなわち歴史を作り出すものであると同時にそれによって作られたものであるがゆえに，それを可能にすることができる，とされる。ブルジョワジーと同様に物象化によって毀損されているプロレタリアートが，どうしてそのような「歴史的発展の同一的主体＝客体」になりうるのか。その答えは，プロレタリアートは物象化によって最も毀損された，極度の非人間化を体現している社会的存在だからという逆説にある。資本主義社会の直接性にとらわれたまま虚偽意識のもとで自足しているブルジョワジーとは異なって，プロレタリアートの社会的存在は，はじめは物象化された社会現象の単なる客体だとしても，ひとたび自分自身を商品として意識するなら，すなわち商品としての自己の階級的地位を自覚するなら，それは全体としての社会的発展の自己意識となるのである。また，そのような自己意識は商品の自己意識であり，プロレタリアートの商品としての自己認識は，認識の客体の構造的な変化をもたらす実践的な性質をもっている，とルカーチは考える。

ルカーチが商品交換を物象化の唯一の原因と見なしていることや，その物象化を無分別と思われるほどに全体化していることとならんで，プロレタリアートの階級意識を以上のような形で観念論的に構成していることについてのホネットの批判は，それはそれとして妥当である。しかしそれにもかかわらず，社会を流動化させようとするルカーチの目論見があまりにも大風呂敷であるとするなら，それに対してホネットの物象化論の射程は逆にかなり限定的になっているのではないか，という疑問は残る。この点については，批判的社会理論としてのホネットの物象化論の射程の問題として，次章で扱うことにする。

最後に，ホネットによるルカーチ解釈に関して，ルカーチの当該のテクストのなかに，はたして彼が期待するような人間学的，あるいは社会存在論的基礎が見いだせるのか，という疑問がつきまとう。先に述べたようにホネットは，ルカーチの「公式の」主張とは異なった「真の人間的実践」を示すものとして，『歴史と階級意識』のなかから「体験をともにする」とか「有機的な統一」，「質的に唯一無比なもの」，「本質的なもの」といった表現をとりだしているが，果たしてそれらはルカーチのテクストにおける「人間学的に跡づけ可能な文言」(30) とまで言いきれるだろうか。これらの表現は，どれ一つをとってみても，とりたてて目新しい言葉でもなければ，内包的にも外延的にも豊かな術語というわけでもない。ルカーチのテクストにおいてこれらの表現は，私にはさほど重要な位置を占めていないように思われる。「人間学的に跡づけ可能」と言うのであれば，ホネットは片言隻句を取り出して事足れりとするのではなく，それらの文言がテクスト全体のなかで他の言葉とどう響きあっているのかを示さなければならないであろう。マルクス主義者になる以前の著作『小説の理論』を見ても，ルカーチにとって人間と世界との本来あるべき関係は，世界がいわば「透明な全体性」において現われることであり，『歴史と階級意識』においては，物象化された「静観的態度」の対極にある「真の人間的実践」とは，諸々の観念論的装飾を取り除けば，全体を認識しつつそれを根本的に変革すること，ではなかったか。以上のような見方が妥当であるとするなら，ホネットの物象化論とルカーチの物象化論との距離はきわめて遠くなると言わざるをえない。「ルカーチの物象化分析の社会学的説明枠組みに全体として見切りをつける」までもなく，もともと両者の物象化論は，あまり交差することのない問題構制を有していたのではなかったか。

4．批判的社会理論としての射程

ハンガリー革命の渦中の熱狂，およびその後の反革命の嵐のなかでの焦燥に彩られた『歴史と階級意識』におけるルカーチの物象化論を，80年以上経過した現在のドイツの社会哲学者が構想する物象化論と「革命的ポテンシャル」などといった点で比較するのは，まったく当を得たことではないであろう。しかし，ルカーチにおいても，フランクフルト学派「第一世代」においても，そしてホネットにおいても，「物象化」の概念は批判的社会理論の鍵概念として

用いられているのであり，「物象化」という規範的含意を多少とも免れ得ない概念を駆使する社会理論は，その社会批判の切れ味と射程を問われざるをえない。本章では，ルカーチの物象化論から離れて，ホネットによって承認論を通じて再構成された物象化論の可能性について考えてみたい。

ホネットの承認論は，前にも述べたように1992年に刊行された『承認をめぐる闘争』や2000年の『正義の他者』で輪郭を与えられ，展開されている[31]。しかし，実はこれらの著書で駆使されている承認の概念と『物象化』で用いられている承認の概念は，同じものではない。ホネットは，イエナ期のヘーゲル哲学とG・H・ミードの社会心理学を手かがりに，人間のアイデンティティの形成に必要な三つの承認の形態（一次的諸関係，法権利諸関係，価値ゲマインシャフト，端的に別の言い方をすれば愛，法，連帯）をそれぞれ区別し，それぞれの承認の形態には自分自身について抱く肯定的な意識や感情を意味する「実践的自己関係」が対応している，としている。ホネットの社会理論の要諦は，このような承認の毀損が，社会的コンフリクトを招くというものであった。しかし，すでに明らかなように『物象化』において認識に先行し，それに対して発生的にも概念的にも優位にあるとされる承認の形態は，これら承認の形態のどれとも一致しないし，どれにも内属しない。

「一次的諸関係（Primärbeziehungen）」すなわち「愛」に基づく関係とは，性的関係や友人関係，親子関係などの，少数の人々の間の強い感情的紐帯によって成立する。ここでは，共生的融合と相互的自立のバランスが十全な情緒的絆を生み出し，理想的な一次的諸関係を可能にする。この関係における承認は，かけがえのない特定の相手に対する感情のこもった慈しみ，情緒的気遣いという性格をもつ。このような承認を通じて個々人は，自分の欲求や願望の価値についての基本的な信頼感，すなわち「自己信頼（Selbstvertrauen）」という実践的自己関係を得ることができる。「法権利諸関係」（Rechtsverhältnissen）」すなわち「法的承認」に基づく関係とは，近代法の下での諸権利の承認関係を指し，その核心は主体の責任能力の承認である。個々人は，近代市民社会のなかでの平等な法権利主体としての承認を通じて，他の成員と同様に責任能力をもち社会的に尊重される主体であるという意識をもつことができる。この場合の実践的自己関係は，「自己尊重（Selbstachtung）」と呼ばれる。最後に，「価値ゲマインシャフト（Wertgemeinschaft）」すなわち「連帯」に基づく関係とは，ある集団が何らかの価値や目的を共有するし，それを生活の指針とすることで成立する。ここでの承認は，個々人が自分の能力や特質が価値あるものとして評価されることを示している。この場合における実践的自己関係は，「自己評価（Selbstschätzung）」と呼ばれる。

以上のような三つの承認形態において，それぞれ承認の拒否・剝奪，すなわち承認の軽視（Mißachtung）が起こりうる。第一に「虐待と暴行」，次に「権利の剝奪と排除」，最後に「尊厳の剝奪と侮辱」である。それぞれのケースにおいて承認の軽視は，自己信頼，自己尊重，自己評価の喪失を招き，当該の人格のアイデンティティを脅かす。ホネットによれば，このよ

うな三つの形態の軽視は，それを被る人々が社会的な闘争に入る動機になりうる。その時代，その社会における文化的な解釈枠組みに依存しつつも，軽視の経験が不正の認識を呼び起こし，しかるべき承認を要求する集団的抵抗を惹起することにより，かくして「承認をめぐる闘争」が繰り広げられることとなる。ホネットは，従来「財の分配をめぐる闘争」として解釈されてきた社会運動や抵抗運動を「承認をめぐる闘争」として再定義し，個人の具体的経験やアイデンティティを視野に収めると同時に政治的，文化的環境のなかにそれらを位置づけることにより，社会的コンフリクトをより重層的に，ダイナミックに説明しようとしてきた。そのことは，ホネットをマルチカルチュラリズムやフェミニズムをめぐる論争にも駆り立てることとなる。

以上のようなホネットの「以前の」承認をめぐる議論に対して，「承認の忘却としての物象化」という主張を展開する際の「承認」は，どのような位置づけになるのだろうか。冒頭でも述べたように，物象化をテーマにしたホネットのタナー講義には，三人のコメンテイターがついており，そのコメントとともにホネットの「返答」が『物象化』の英語版には収められている。そのなかでホネットは，自らの承認概念に対するコメンテイターたちの批判に答えている。マーティン・ジェイが序文で指摘しているように，コメンテイターたちが三者三様に異議を唱えている点は，認識に先立つ相互行為，本源的承認についてのホネットのきわめてオプティミスティックではないかと思える見解である[32]。この点についてホネットは，自分が考えている「承認」は肯定的関心や尊敬といった規範を含むものではなく，また本源的な承認においては必ずしも肯定的で好意的な感情が作用しているわけでもない，としている[33]。したがって，愛や憎しみ，アンビバレンスや冷淡さは，すべて本源的承認の表現でありうるのである。

> 伝統的な名誉や近代的な愛，平等な法といった社会制度に体現されているような，規範的に実質的な承認の形態は，本源的承認によって開かれた実存的な経験の図式が歴史的に『肉づけされる』ようになる，さまざまな仕方を表わしている。他の諸個人が仲間の人間であるという経験がなければ，われわれはこの図式にわれわれの行為を導いたり制限したりする道徳的価値を与えることはできないだろう。したがって本源的承認は成し遂げられねばならないのであり，われわれは，特定の形態の関心や好意を表明するようにわれわれに強いる承認規範へと適応できるようになる前に，他者に対して実存的共感を感じなければならないのである。私自身の承認論の構造に対してそれがもつ意味は，以前論じた承認の形態以前に，ある承認の段階，すなわち一種の超越論的条件を表わす段階をさし入れなければならない，ということである[34]。

これで明らかなように，物象化論のなかに位置づけられた「承認」は，『承認をめぐる闘争』や『正義の他者』で論じられた「承認」とは別の概念的水準にある，「超越論的条件」を形づくるものなのである。後者の侵害は「相互承認の（制度化された）原則に由来する規範の侵

害」であり，したがって道徳的侵害のケースと考えられ「承認をめぐる闘争」を引き起こすのであるが，

> しかしながら，これらのケースはどれも，「物象化」という用語によって（文字通り）指し示させようとする現象とは関係がない。というのも，物象化は，主体が現行の承認規範を侵害しているだけでなく，他者を「仲間の人間」とは知覚したり扱ったりすらしないことによる先行する条件そのものを侵害するという，むしろありえない社会的ケースを示しているからである[35]。

物象化のカテゴリーを再びアクチュアルなものにしようと試みる際に，物象化をこのように捉えた場合には大きなアポリアが現われる。すなわち，本源的承認のこういった類の「ありえない」消失を，どうやって説明するのか，という難問である。先に見たようにホネットは，商品交換市場の拡大が物象化を引き起こす原因であるとするルカーチの説を斥けている。そこでホネットは，「物象化の病因論についての一般的な，むしろ漠然とした仮説」として，『物象化』の本論では「一面化された実践」と「イデオロギー的な信念体系」の作用をあげている。「先行する社会関係のすべての意識が消え去ってしまうほどに他者を単に観察することが自己目的になっている社会的実践に参加しているか，あるいは行為する際にこのような本源的な承認を後から拒絶することを強いるような信念体系に支配されているのかのどちらか」[36]が，物象化を促進するというのである。ホネットは，この両者が相乗効果を及ぼす可能性に言及したり，「返答」では一面的な実践が自立化し，さらにそれがルーティン化，習慣化することが物象化の原因になる，としたりしている。しかしいずれにしても，「本源的承認の消失」という「ありえない」事態に対する説明としては，切れ味は悪く，説得力にも欠けるように思われる。「一面化された実践」の例としてホネットは，勝負に熱中するあまり競技相手との親睦を深めるというもともとの目的を忘れてしまい，勝負が自己目的化してしまうテニス・プレーヤーをあげているが，彼自身も「返答」においてあまり適切ではない例として自己批判しているように，このようなトリヴィアルな例では「本源的承認の消失」の原因には，とうてい迫ることはできないだろう。『物象化』の本論には自己物象化の例として，就職のための面接やインターネットによるパートナー探しのようなこれらもまたトリヴィアルな例が引きあいに出されているのだが，やはり「本源的承認の消失」との関連は不明瞭になっている。「返答」では，この点に関して，「真の（true）物象化のケース」と「擬似的（fictive）物象化」が区別され，前者は社会的生活世界においては，まれで例外的なケースであるとされている。この点については，タナー講義における討論を経てはじめてホネットにとって明らかになったとのことである。「擬似的物象化」は，社会において幅広く見られる，他者をあたかも物のように扱う態度を意味しているが，それらは決して人と物との存在論的差異を忘れてはいない，とされる。

物象化をこのように区別したとしても，依然としてその二種類の物象化がどういう関係にあるのかが判然としない。「真の物象化」が「先行する承認に由来しているという感覚がもはや失われているような認識」であり，「承認に敏感な認識の形式」との間に「擬似的物象化」のグラデーションがあるのであろうか。もしそうであるのなら，さらなる説明が必要であるし，もしそうでないのなら，物象化の名に値する現象は，文明史的カタストロフを意味するような出来事に限定されてしまうのではないか。批判的社会理論の課題としては，その解明はとてつもなく重い課題ではあろうが，また実際ホルクハイマー，アドルノの『啓蒙の弁証法』に連なる文明論的考案としての位置づけも可能ではあろうが，日々いたるところで生じているさまざまなレヴェルの社会的コンフリクトに介入したホネットの「以前の」承認論にくらべれば，その射程は短いと言わざるをえないであろう。ホネットは，「返答」の末尾で次のように述べている。その引用でもって，本稿の結びとしたい。

> しかし，物象化というテーマに対する私の関心を呼び起こした現象がまさに何であったかを思い出すなら，それは「産業的」大量殺戮を解釈する際の困難であったということを認めねばなるまい。今日でもなお，どのようにして若者たちが，何百人ものユダヤ人の子どもや女性の後頭部を無慈悲に打ち抜くことができたのかを理解するのは，難しい。そしてそのようなぞっとする行為の要素は，20世紀末を特徴づけるあらゆるジェノサイドにも見いだせるのである。もし，われわれは人間として先行する承認を通じて互いに関係しあう ―― それは私が確信している事実なのだが ―― のなら，こういった大量殺戮は，このような先行する承認を消し去ったり「忘れたり」することをわれわれはどう説明するのか，という問いを引き起こす。私のささやかな研究は，とりわけ20世紀のこの人間学的な謎に対する答えを見いだそうとする試みなのである(37)。

〔注〕

(1) 正式名称は，「人間的価値に関するタナー講義」。アメリカの学者であり，経営者，慈善事業家でもあるオバート・クラーク・タナーを記念して，2000年からアメリカとイギリスの九大学のうちの一つで毎年開催されている。

(2) Axel Honneth, *Verdinglichung. Eine anerkennung Studie*, Suhrkamp Verlag, 2005.; Axel Honneth, with commentaries by Judith Butler, Raymond Geuss, Jonathan Lear, edited and introduced by Martin Jay, *Reification. A New Look at an Old Idea*, Oxford University Press, 2008.

(3) 日本でも，筆者もコメンテーターとして参加したシンポジウムが，本年（2010年）3月明治大学で開催されている（2009年度　日本社会学理論学会研究例会「社会学理論形成における承認論の可能性 ―― アクセル・ホネットにおける承認と物象化 ――」)。

(4) Georg Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein, Studien der marxistische Dialektik*, Luchterhand, 1970.（城塚登・古田光訳，『ルカーチ著作集9　歴史と階級意識』，白水社，一九

六八年。）

（5）Honneth, *Verdinglichung. Eine anerkennung Studie*, S. 12－16.

（6）ただし，巻頭のエピグラフには，ホルクハイマー，アドルノの『啓蒙の弁証法』から引用した「あらゆる物象化は，忘却である」という一文が用いられている。『物象化』の本文でも，たとえば承認の認識に対する優位のテーゼを論証したり，物理的世界の物象化に言及したりする際に，アドルノが引きあいに出されている。

（7）Ebd., S. 12.

（8）Jürgen Habermas, *Theorie des Kommunikativen Handelns*, Band1, Suhrkamp Verlag, 1981.

（9）ホネットとハーバーマスの関係，特に前者が後者の「批判理論のコミュニケーション論的（あるいは言語論的）転回」に対して加えている批判については，批判的社会理論における規範的基礎や人間学的，社会存在論的前提にまで立ち入って論じる必要があろう。

（10）Axel Honneth, *Kritik der Macht. Reflexionsstufen einer kritischen Gesellschaftstheorie*, Suhrkamp Verlag, 1985.（河上倫逸監訳，『権力の批判 ―― 批判的社会理論の新たな地平 ――』，法政大学出版局，1992年。）

（11）Axel Honneth, *Kampf um Anerkennung. Zur moralischein Grammatik sozialer Konflikte*, Suhrkamp Verlag, 1992.（山本啓・直江清隆訳，『承認をめぐる闘争 ―― 社会的コンフリクトの道徳的文法 ――』，法政大学出版局，2003年。）

（12）Axel Honneth, *Das Andere der Gerechtigkeit. Aufsätze zur praktischen Philosophie*, Suhrkamp Verlag, 2000.（加藤泰史・日暮雅夫他訳『正義の他者 ―― 実践哲学論集 ――』，法政大学出版局，2005年）

（13）Lukács, a. a. O., S. 170－171.（邦訳，162ページ。）

（14）Honneth, *Verdinglichung*, S. 24.

（15）Ebd., S. 24－25.

（16）Ebd., S. 27.

（17）Ebd., S. 31.

（18）Ebd., S. 42.

（19）Ebd., S. 57.

（20）Ebd., S. 69.

（21）Ebd., S. 97.

（22）Ebd., S. 98.

（23）Ebd., S. 88－99.

（24）Lukács, a. a. O., S. 170－171.（邦訳，162ページ。）

（25）たとえば「物的世界観」から「事的世界観」への転換を唱える廣松渉の「物象化論」も，マルクスの独創的読解を通じて「社会的関係の物象化」に焦点を合わせている。廣松渉，『物象化論の構図』，岩波書店，1983年を参照。

（26）この点に関して，筆者が前記のシンポジウムで直接ホネットに問い質してみたところ，彼は，物象化には二つの側面があり，環境に対する態度の物象化と人と人との関係の物象化とは区別されなければならないが，自分は後者について扱っていないということを認めた。しかし「関係の物象化」という論点が欠落することの問題性については，残念ながら十分な討議はできなかった。

（27）Lukács, a. a. O., S. 175.（邦訳，166－167ページ。）

（28）ルカーチとホネットでは，この「第二の自然」という言葉の用語法が異なっている。ホネットが，習慣化，制度化した行動や態度，すなわち一種のハビトゥスを指すものとしてこの言葉を使って

いるのに対して，ルカーチは，人間がつくりあげた社会や歴史が人間とは独立して存続，展開していくあり方をこの言葉で表現している。

(29) Lukács, a. a. O., S. 267.（邦訳，272 ページ。）

(30) Honneth, *Verdinglichung*, S. 26.

(31) これらの著作で提示・展開されているホネットの承認論については，水上英徳「批判的社会理論における承認論の課題 —— ハーバーマスとホネット ——」（永井彰・日暮雅夫編著『批判的社会理論の現在』，晃洋書房，2003 年）でコンパクトに紹介されている。本稿におけるホネットの「以前の」承認論の要約に関しては，この論考に多くを負っている。

(32) Honneth, *Reification*. p. 10.

(33) Ibid., p. 152.

(34) Ibid., p. 152.

(35) Ibid., p. 154.

(36) Honneth, *Verdinglichung*. S. 100.

(37) Honneth, *Reification*. p. 158.

〔付記〕

本稿は，2007 年度佛教大学国内研修の成果である。

（たつみ　しんじ　現代社会学科）

2010 年 4 月 12 日受理